

第6回目の研究全体会は、京都光華女子大学 こども教育学部 こども教育学科 教授 田縁 真弓先生をお招きして、研修を行いました。

研究主題

関わり合い、学びを広げ、深める児童の育成

～思いを豊かに表現できる授業づくりを通して～

I 外国語の授業作りについて

表現や語彙の導入をどう言語活動につなげるかということについて、「I like～」の授業の指導計画を例にして、具体的に説明いただきました。

- | | |
|-------|---|
| 1 時間目 | 新出表現や語彙を指導者のやりとりや「おはじきゲーム」や「チャンツ」などを通して、知る。エンドプロダクトを示し、児童に見通しをもたせ、伝えたいという意欲を芽生えさせる。 |
| 2 時間目 | ミッシングゲームなどを使って、表現や語彙を確認してから、ペアで尋ね合ったりして、表現に慣れ親しむ。 |
| 3 時間目 | 何が好きか尋ね合う活動が中心になる。ステレオゲームなどを活用し、児童が聞きたいという思いをもてるようにする。(聞く必然性) |
| 4 時間目 | 相手に伝わるように工夫しながら何が好きか尋ねたり答えたりする。 |

どの授業でも、知識・技能から思考・判断・表現力を扱う流れで授業をつくっていくのは、どの単元でも共通している。

表現や語彙の導入では、歌やチャンツを短時間でできるモジュールの活用も有効である。

児童が生き生きと英語を使う活動を設計するために留意すべき視点として、以下の5点がある。

- ① 伝える内容に自己との関連性がある。
- ② 他者と関わる必然性が内包されている。
- ③ 場面や状況や条件の具体的な設定する。
- ④ 使用する語彙や表現、伝える内容に限定的であっても自由度がある。
- ⑤ 目的達成の手段として活動が位置付けられている。

生き生きと英語を使う活動の具体例をご紹介します。

低学年の例

天気を扱う場面では、今日の世界の天気という本当の情報を使って、やりとりを行う方法がある。本当の情報を使い、インフォメーションギャップのある状況を作ると、児童の聞きたいという意欲が高まる。

高学年の例

レストランで注文する場面では、自由度のある役割練習を行い、問題解決タスクを通して相手を意識した活動を行うことが有効である。また、高学年の児童には、パフォーマンス評価のBは、どういったものなのか事前に示すことで、児童がより具体的に目指すところを理解し、生き生きと活動するようになる。

児童にとって伝える内容に自己との関連性があることや、相手と関わらなければいけない必然性や意味を見出すこと、なんのためにその活動をしているのかの目的が明確になっていることが授業を構成する上で大切である。



2 外国語活動・外国語科における ICT 活用について

ICT を活用するよさ

- ① 学習の内容をカードを使って視覚的に伝えられる
- ② 動画や音声の活用
- ③ 個々の学習理解度に合わせた指導が可能
- ④ 宿題の提出・管理ができる(双方向性)
- ⑤ ポートフォリオとしての管理が容易



児童

手元に送り、拡大して見られる
音声が付けれられる
タブレットで書き込みは不向き
個人的に質問もできる

上記のように、児童生徒の言語活動の更なる充実や、指導・評価の効率化など ICT を活用するメリットは多い。

ICT の具体的な活用例

- ① アルファベットづくりにチャレンジという活動では、身の回りのアルファベットを探し、写真を撮って、集める活動をした。自分のペンを並べてアルファベットを作ったり、傘の柄を写真に撮ったり、それぞれの児童が楽しみながら生き生きと活動していた。
- ② 高学年では、ワークシートの配布がクリック一つで一斉にでき、児童が取り組んだものを提出するのも簡単である。教師が丸をつけたものを児童に返却するのも簡単である。
児童が作ったものを使って、さらにワークシートを作ることできる。

3 絵本の活用

「White Rabbit's Color Book」を使って、実際に読み聞かせをどのように進めていったらよいのか、絵本の読み聞かせの効果に触れながら具体的にお話いただきました。

小学校の先生は、すでにすばらしい読み手である。どのように理解させるか、どのように発話させるかを考えて、絵本を活用してほしい。

絵本は、内容を推測しながら理解でき、英語独特のリズムを身に付けられる。また、繰り返しの表現が多いので、自然に文に触れ、声に出して言えるというよさがある。絵本は、絵が児童の理解の助けになるので、絵本を日本語に訳さず、英語の響きを大切に読んでいくようにしていく。



読み聞かせからの発展

絵本は読み聞かせで終わるのではなく、劇化をするなどの工夫ができる。

中学年の「Hi Friends.」の教材から教師が読み聞かせを行うことに加え、児童に自分の思いを伝え合わせるために、劇化を行った。

お話の並び替えをさせ、話が分かったか確認させたり、児童にセリフを読ませ録音し、自分の読みを振り返られるようにしたりした。最終活動として、セリフと絵を組み合わせて英語劇を行い、その後に、ユニットクイズを行い文字指導に繋げていった。

高学年でも言語活動を使って表現を習得させていくことが大切である。その中で、自分の思いをどう伝えるのか、そしてどのような思いを伝えたいのかを児童に考えさせることも大切なポイントである。

教師側の英語量が増えれば、児童の英語量も増えるので、積極的に絵本を通して英語を使っていく。

さまざまな絵本があるので、学習内容に合わせて児童の興味関心をひく絵本教材を用意し取り組んでほしい。